

## 平成27年度

「生徒自身による『スマホ安全利用私たちのルール』づくり」  
研究実践報告書

## 【はじめに】

スマートフォンの普及に伴い、SNS上での不適切な投稿や他人に対する誹謗中傷などの問題が顕著化している。文部科学省が毎年実施している「問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の「いじめの態様」においても「パソコンや携帯電話で誹謗中傷や嫌なことをされる」の項目は平成23年度から平成24年度調査では大きく増加している。

しかし、ネットいじめを含めたネットトラブルの問題は大人からは見えにくい部分があり、教員による指導や監視だけでは解決が困難である。ネットトラブル問題の解消や早期発見には、子供たちがネットいじめやネットトラブルを自分自身の問題と捉え、課題解決に向けて主体的に関わろうとする態度と自らが課題を解決していく、いわゆる自助・共助の力を養うことが必要である。

県教育員会は、平成26年度から「生徒自身による『スマホ安全利用私たちのルール』づくり」研究校を指定し、生徒自身が主体的に話し合い活動を行い、自分たちが守るべきルールを策定する活動をとおして、自助・共助の力を生徒自身が身につける研究に取り組んだ。

また、平成27年度は取り組みの過程で明らかになった、生徒のネット利用状況について、それぞれの学校の指導に生かすため、各研究校で教員研修資料を作成し、教員研修を行った。

## 【平成27年度研究委嘱校】

- ・ 県立蓮田松韻高等学校
- ・ 県立宮代高等学校
- ・ 県立芸術総合高等学校
- ・ 県立所沢高等学校
- ・ 県立飯能高等学校
- ・ 県立三郷工業技術高等学校

## 【平成27年度事業協力団体】

- ・ デジタルアーツ株式会社（代表生徒のワークショップ）
- ・ NPO法人スクールネットワークアドバイザー（ネットの安全利用に関する講演会）

## 【取組概要】

- ① 各研究校で20人から40人の代表生徒を選出し、代表生徒が話し合い活動等をとおして「私たちのルール」の案を作成する。
  - ② 作成した案を各クラスに提示するなどして全校生徒から意見を集め、代表生徒がとりまとめて「私たちのルール」を策定する。
  - ③ 外部講師によるスマートフォン等の安全利用に関する講演会を実施し、そこで代表生徒が、各学校独自の「私たちのルール」を全校生徒に周知し、遵守を呼びかける。
- ※ ①で明らかになった各研究校の生徒のネット利用状況を教員研修資料にまとめ、この資料をもとに教員研修を実施

## 【ルールづくりの基本的な流れ】

### 1 代表生徒の選出

代表生徒の人数は20人から40人程度を目安とし、生徒会役員、ホームルーム委員会、特定のクラス、部活動、希望者などから選出する。

### 2 『私たちのルール』原案作成:代表生徒による話し合い(ワークショップ)

〈ワークショップ参加生徒〉 代表生徒

〈講師〉 デジタルアーツ株式会社

工藤 陽介 氏

〈ワークショップ手順〉

- ① 講師によるスマホの危険性に関する講義
- ② 代表生徒によるブレインストーミング  
4人から6人のグループに分かれ、グループごとにスマートフォンやインターネットに関する生徒自身の経験、生徒間で問題になっていること、スマートフォンを利用することの利点等について事例を挙げる (KJ法による)

#### ワークショップで挙げられたトラブルの例

ネットゲームにはまって、夜更かししてしまう。

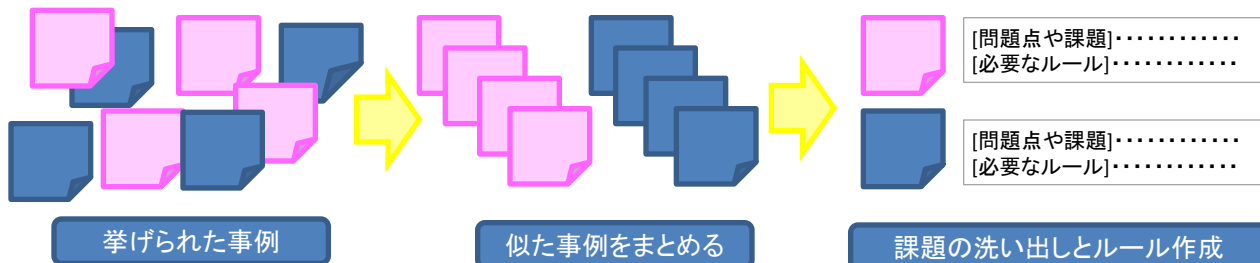
メールのやり取りが気になってほかのことが手につかない

ネットで知り合った人と直接会った友達がいる。

ネットのメッセージを誤解されて、学校で無視されたことがある。

- ③ 問題点や課題の吟味

②で挙げられた事例を似た事例ごとに分類して、それぞれの問題点や課題を整理して必要なルールの案を作成する。



- ④ グループごとに作成したルール案を集約し、代表生徒が『私たちのルール』の原案を作成する。

### 3 全校生徒による『私たちのルール』の検討

- ① 代表生徒が各HRで原案について説明し、HRで協議をしたり、私たちのルール原案に関する全校生徒対象アンケートを実施したりするなどして、全校生徒からの意見を集める。
- ② 代表委員は全校生徒からの意見を集約し、各研究校の『私たちのルール』を策定する。

#### スマートフォンの安全利用に関する講演会

〈講演テーマ〉「ネットの安全利用について」

〈講師〉 NPO法人 スクールネットワークアドバイザー 赤木 聡 氏

研究校はネットの安全利用に関する生徒の意識啓発のための講演会を実施する。

講演会の中で、代表生徒が『私たちのルール』を全校生徒に周知し、遵守を呼びかける。

## 【ルールの内容・成果等】

「各研究校の『私たちのルール』」※ 同種のルールはまとめています。

- 1 ツイッターなど、ネット上で悪口や誤解を招くような書き込みはしない  
(便乗、拡散、仲間はずれなどはしない。)
- 2 スマホを長時間使用することを控える。(22時から6時までの使用を控える)
- 3 個人情報の取り扱いに注意する(名前、住所、学校、写真など)
- 4 スマホを使用しながら他のことをしない。  
(自転車乗車中、歩行中、会話中、食事中など  
何かしようとする時には、必ずしまってからにする。)
- 5 ネットのリスクを考えて行動する。  
(違法サイト、危険なアプリ、出会い系サイトなどに注意する)
- 6 ネットは怪しいということを前提に、  
まわりの意見を心得て正確な情報を取り入れる。
- 7 相手の気持ちを傷つけないように考えながら発信する。「(文字には感情がない!)」
- 8 「他の人に迷惑をかけない!」(ネット上に個人情報や画像などをむやみに掲載しない。)
- 9 家族内で時間制限や課金制限をもうけて、家族と一緒にルールを守る。
- 10 フィルタリングを設定し、アンチウイルスソフトを入れておいて状況に応じ、高めに設定したり、低めに設定したりする。
- 11 NOセキュリティホール Yesバージョンアップ
- 12 スマホだけに頼らず連絡黒板を活用しよう。
- 13 スマホの使い方を見直すためにノースマホデーを活用しよう
- 14 学習にスマホを取り入れてみよう。



## 【各学校独自の取組】

- ・他県や異校種との交流
- ・生徒手帳等へのルールの掲載
- ・スマホ断食、ノースマホデー
- ・寸劇・映像や紙芝居、ポスターを活用したルールの周知

## 【成果】研究実践報告書から

- ・スマホ断食やノースマホデーに取り組んだ生徒を中心に、主体的にスマホの活用について見直すことができた。また、広報誌で随時活動の様子を伝えていたため、全校生徒に対して日常的にスマホの使い方を考えるきっかけを作ることができた。
  - ・「ルールづくり」に先行して「スマホ安全利用」講演会を開催することで、生徒全体にスマホ等の安全な利用方法について再認識させることができた。また、「ルールづくり」に参加した1年生にとっては、よい動機付けとなった。
  - ・「ルールづくり」に参加した生徒たちからは、「自分自身も正しい使い方を理解していなかったのが、何が良くて何がいけないのかがよくわかった。」「これまでトラブル等があった人はもちろん、そうでない人も、今回のルールを守って、安全にスマホを利用してほしい。」「以前は気軽にネットに書き込みをしていたが、慎重に行動しなくてはならないという気持ちになった。」等の感想が聞かれた。このことから、生徒のネット問題に関する規範意識は向上したと考えられる。
- ・策定主体の生徒がスマホを安全に使うために、危険を回避するために[使わない]、[見ない]といった否定的な行動でなく、より積極的に[使う]ためにどうするかを、実際に行動する範囲で考えることができた。
- ・全校生徒を対象とした生徒指導教室では全校生徒も意欲的に発表を聞き、生徒の感想からも具体的にアップデートをするかどうか、課金については考え直したいであるとか具体的な行動が記述され生徒一人一人の行動を促すことができた。

## 【教員研修資料の作成】

### 【県立所沢高校の取組例】

スマホの利用状況等について、「私たちのルール」作成代表生徒が実施したアンケートのデータを活用した研修資料を作成し、教員研修を実施した。

平成 26 年 1 月 14 日  
所沢高校  
スマホ活用プロジェクトチーム

## スマホの安全利用

～わたしたちのルールづくり～  
教員向け研修会 資料



### ～ 2015 年度 スマホ活用プロジェクトチーム (SMAP) 主な取組み ～

- 6 月 所沢高校が「スマホの安全利用」の研究指定校になる。FREEにて在校生に報告
- 6 月 9 日 第 1 回事業説明会 (参加者 7 名)
- 6 月 11 日 前年度・今年度研究指定校の芸術総合高校を訪問 (本部生徒 4 名)
- 6 月 23 日 第 2 回事業説明会 (参加者 16 名)。以後、プロジェクトチーム会議 (略称: SMAP) 適宜開催
- 7 月上旬 スマホ断食実施…有志
- 7 月中旬 (スマホ利用実態調査) 突撃 100 人アンケート実施。結果は FREE にて報告。
- 8 月 25 日 講演「高校生の携帯電話の利用実態と情報リテラシー」開催。講師 東京情報大学教授 園岡尚男氏
- 8 月下旬より FREE にて学習アプリの紹介を開始
- 10 月 学力向上プロジェクトチームと連携しオンライン講義の比較調査実施
- 10 月 20 日 ノースモデー実施
- 10 月下旬 スマホの利用実態調査アンケート (各学年 2 クラス) 実施
- 10 月 30 日 「提言」策定のためのワークショップ開催
- 12 月 15 日 在校生向け報告会および講演会開催 ※「所高のスマホ 3 カ条」提言

### ～ 2015 年度 スマホ活用プロジェクトチーム (SMAP) 主な取組み ～

- 6 月 所沢高校が「スマホの安全利用」の研究指定校になる。FREEにて在校生に報告
- 6 月 9 日 第 1 回事業説明会 (参加者 7 名)
- 6 月 11 日 前年度・今年度研究指定校の芸術総合高校を訪問 (本部生徒 4 名)
- 6 月 23 日 第 2 回事業説明会 (参加者 16 名)。以後、プロジェクトチーム会議 (略称: SMAP) 適宜開催
- 7 月上旬 スマホ断食実施…有志
- 7 月中旬 (スマホ利用実態調査) 突撃 100 人アンケート実施。結果は FREE にて報告。
- 8 月 25 日 講演「高校生の携帯電話の利用実態と情報リテラシー」開催。講師 東京情報大学教授 園岡尚男氏
- 8 月下旬より FREE にて学習アプリの紹介を開始
- 10 月 学力向上プロジェクトチームと連携しオンライン講義の比較調査実施
- 10 月 20 日 ノースモデー実施
- 10 月下旬 スマホの利用実態調査アンケート (各学年 2 クラス) 実施
- 10 月 30 日 「提言」策定のためのワークショップ開催
- 12 月 15 日 在校生向け報告会および講演会開催 ※「所高のスマホ 3 カ条」提言

#### 所高のスマホ 3 カ条

- ・スマホだけに頼らず連絡黒板を活用しよう!
- ・スマホの使い方を見直すためにノースモデーを利用しよう!
- ・学習にスマホを取り入れてみよう!

- 12 月 15 日 スマホの利用実態調査 (全校) 実施 → 次頁以降に集計結果を記載
- 1 月 14 日 教員向け研修会開催

#### 問23 ネット上で知り合い実際に会ったことがある「友だち」

問23	なし		1人以上5人未満		5人以上10人未満		10人以上20人未満		20人以上30人未満		それ以上		LINEは使っていない		
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
人数	387	435	30	82	16	19	9	12	1	5	6	4	7	7	1020

「なし」の計	「1人以上」の計	計
836	184	1020
82.0%	18.0%	100%

1 / 7



教員研修の様子

【成果】全校生徒を対象としたデータにより、生徒のスマホの利用状況がわかってきた。特にSNSの利用については、教員の想定とは異なることもあった。

#### ～生徒の声～

- ・twitterなどで共通の話題で盛り上がり、仲良くなった人とライブなどで会うことがあります。相手は中学生だったり、大学生だったり、様々です。
- ・友達との友達とLINEのグループで知り合い、実際に会うことがあります。
- ・ネット上で仲良くなった異性と実際に会う話になったけれど、話を聞いたリアルな友人が危険に思いそれを止めたという話を聞いたこともあります。



5 / 7

#### 問25

これまでにLINEやtwitterなどのSNSを利用している中でトラブルになったこと (現在進行形も含む) はありますか。 (複数回答可)

誹謗中傷されたことがある。	77 人	7.5 %
仲間外れにされた。あるいは、自分を除いた裏グループがつけられていたことがある。	29 人	2.8 %
伝達で不十分で誤解が生じたことがある。	307 人	30 %
知らないうちに大切なことが決まっていたことがある。	171 人	16.7 %
既読無視が原因でトラブルになったことがある。	30 人	2.9 %
未読無視が原因でトラブルになったことがある。	36 人	3.5 %
上記以外のことでトラブルになったことがある。	49 人	4.8 %
トラブルになったことはない。	559 人	54.6 %
LINEやtwitterは使っていない。	19 人	1.9 %

#### ～生徒の声～

- ・悪口を言うための「鍵アカウント」があり、限られたメンバーで陰口のようなことを言っていた。ところが、メンバーの一人がスクリーンショットを撮って、twitterに貼り出してしまいトラブルになった、という話を聞いたことがあります。
- ・LINEでのやり取りも日常の延長線上にあるように思います。日常での「からかい」などがそのままLINE上に持ち込まれたりすることもあります。



### 【三郷工業技術高校の取組例】

生徒が作成した映像や紙芝居の活用による教員研修

#### 【教員の感想】

- ・生徒が意欲的に活動していた。発表生徒の「伝えよう」という気持ちを感じることができた。ところどころ専門的なことも多くわからないところもあった。
- ・実例を挙げることでより具体的に理解できた。
- ・生徒の現状と問題について理解できた。もっと具体例が多いとよかった。